

『琉球官話集』補注追論

池宮, 正治 / IKEMIYA, Masaharu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

259

(終了ページ / End Page)

303

(発行年 / Year)

1991-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002757>

# 『琉球官話集』補注追論

池宮正治

## 凡 例

1 本稿は「宮良当壮全集」10巻所収の「琉球官話集」について、そこに記された沖縄方言（那覇方言であるといわれる）と宮良当壮氏の注記などを中心に検討したものである。

2 項目語の上の算用数字と筆者が補注で引用した漢数字のページ数は、右「宮良当壮全集」のページ数であることを表している。

3 各項目語のうち、下段の括弧「」内は、項目語に対する宮良氏の見解である。その際筆者の必要な範囲で引用し、省略に従った場合にはそれぞれ（上略）、（中略）、（下略）、（略）とし、宮良氏の見解を欠く場合は（ナシ）とした。

- 4 宮良氏見解のうち、△印は沖繩方言、○印は八重山方言を示している。
- 5 ※印以下は、筆者の「琉球官話集」および宮良氏の見解に対するコメントである。
- 6 本稿は、拙稿「『琉球官話集』補注追勘」(琉球大学法文学部紀要「国文学論集」三三三号 一九九〇年三月)、「琉球官話集」補注追考」(小野重朗先生傘寿記念論文集「南西日本の歴史と民俗」一九九〇年九月)、「琉球官話集」補注追記」(琉球大学法文学部紀要「国文学論集」三四号 一九九一年三月)に続くものである。なお本稿の次に「『琉球官話集』補注追攷」(仲松弥秀先生記念論集 一九九一年 月)と続くものである。上記の諸論をも同時に参考にされることを期待する。
- 7 「宮良当壮全集」所収の「琉球官話集」の底本は、天理大学図書館所蔵の、敦厚堂・鄭干英の名前の見える写本で、この系統の写本としては最も善本と思われるものである。ただ重複が多いなど、書誌的な研究は今後に残されている。敦厚堂・鄭干英については下記で若干触れることにする。
- 8 本稿で参考にしたテキストは、①石垣市立八重山博物館所蔵の「光緒四年戊寅□種吉祥日写之／官話／□□氏仙山飯筆者／新本仁屋」とあるものと、②法政大学沖繩文化研究所所蔵の「琉球二字官話集」(横山重氏旧蔵、四五枚目に「同治年」と書かれた落書きがあり、このころのものか)、それに③天理大学所蔵の「官話 三字口」(最初のところに「同治拾壹年壬申四月朔日仕

立」とあり、後ろに「三男 多嘉良松金」「天福」とある)の三本で、参照・引用の際は①を「新本家本」、②を「二字」、③を「三字口」と略称した。

- 9 「琉球官話集」の概説については、「追勘」に記したので、ここでは繰り返さない。

- 10 ここで取り扱ったのは、一四九頁から三四一頁までの一六五項目語である。

#### 敦厚堂・鄭干英について

底本の編者(著者)については、宮良当壮が本書テキストの表紙に墨書された「敦厚堂・鄭干英」であるとしたが、誤字誤写が多いことから、とうてい原本もしくはこれに近い手沢本とは認めがたく、せいぜい筆写者か所有者であるうかと述べておいた(『琉球官話集』補注追勘)(琉球大学法文学部紀要「国文学論集」三三三号 一九九〇年三月)。宮良氏はさらに、鄭干英を琉球の学者の支那名であるとし「恐らく沖繩本島の人、もつと詳しく言へば、那覇の人である」と述べ、これに対して筆者は「那覇の久米村の唐栄の子孫かとも思われるが、久米村の鄭氏の堂号は「□徳堂」と、「徳」を使うのが例で、その堂号からするとこれ以外の出身であると思われる。堂号は仏間に掲げるもので、個人の号でもあり、親子代々使用する場合もある。万一久米村の出身でないまでも、ダ行とラ行の混同の例から見て、宮良の推定通り那覇の出身ではあろう」(同上)の述べた。

例えば、書家の鄭嘉訓とその子鄭元觀孫の鄭其昌は経徳堂、鄭元偉は通徳堂、鄭永泰(仲嶺親雲

上)は樹德堂、鄭光瑞(古波蔵里之子親雲上)と鄭宏猶(宜保里之子親雲上)は崇德堂、鄭德潤(屋富祖親雲上)は慈德堂、鄭氏宮城家は振德堂という具合である。鄭氏池宮城親雲上の「嘉德堂規模帳」の冒頭「鄭家排德字堂名由来」には、次のようにある。

大宗名通德堂、錦字箋、交際部師生云、通德門、註云、鄭玄字康成、学徒数千人、孔融深敬之、特立一郷、曰鄭公郷、其曰公郷、其曰通德門。

漢末の学者鄭玄が通德門といていたので、鄭氏は德字を堂号に排するのであるといふのである。これらの德字堂号の鄭氏の一族は、洪武年間に来琉した鄭義才を初代にするもので、福州閩の長樂県出身である。したがって「敦厚堂」は、この系統の家ではない。

ところがこの堂号を記した資料がある。これを初めて紹介したのは和田久徳・白石晶子氏で、お茶の水女子大学人文科学紀要第二〇巻(一九六七年三月)に「鄭良弼(横山重氏蔵)歴代宝案内内容目録」のなかで、その鄭良弼本に「敦厚堂 鄭良弼 珍藏」の朱印があるよしである。この鄭氏は弘化元(一八四四)年のフランス軍艦の来琉の際通訳官として活躍したことが、フランス側の資料でも明らかであるといふ。「官話集」の「敦厚堂」がこの系統の人であることはこれで明らかである。

さてこの一族は、明の嘉靖年間に閩から鶴屋将監によって夫婦ともども誘拐されて本土の豊後に連れてこられ、その後久米村に入った鄭肇祚を始祖とする氏族である。良弼はその九世で、乾隆五四(一七八九)年に生まれ咸豊元(一八五二)年に死んでいる。官は紫金大夫(親方)に上り(一八三

八年)、フランス艦来琉当時は真栄里親方と称していた。彼の家譜には「道光二十四年甲辰三月十一日因夷船到国奉命充為那覇地方官至三十年正月十二日方以退職」とだけあり、細かい行動の様子は書かれていないが、殆ど中心的な働きをしつらしい(和田・白石論文)。家譜を見ると、魏学賢牧志里之子らと科律を編纂したり、冊封使の迎接に大いに活躍した能吏であることがわかる。

この人の次男(長男が十八才で早死している)で実質長男)乗衝(一八一四)の家譜には、一八五四年から五八年まで四年間薩摩の園田仁衛門と大窪八太郎に「官話」を教授したとある。さらに五年の六月から翌年の八月まで岩下新之丞にやはり「官話」を伝授したとある。恐らく園田仁衛門といふのは、官話に英語(カタカナ)の振られた「琉英国語」の筆記者園田実徳と同一人であろう。良弼が「敦厚堂」であることが分かっているので、その長男筋を調べていくと、その上には思い当たる人はなく、乗衝の孫に鄭文華といふのがいる。咸豊九(一八五九)年生まれ、童名を松金、号を于英といふ。宮良氏のいう「鄭干英」の「干」はこの「于」の誤字あるいは誤読ではないかと思われる。琉球では家譜に書かれているような号を前面に出すことは殆ど見られないが、これらより前中国語の会話文を記したいわゆる「百姓官話」には「鄭定菴」といふ琉球側の通事が出ているが、定菴はこの人の号であって、正式には「鄭天保」(一七二二―一五四)と言っていた。したがってこうした言い方があったことも認めることが出来る。つまり鄭干英は鄭于英の誤りであって、敦厚堂・鄭良弼の嫡流である鄭文華をその人と見なすことが出来る。これによって底本の写本としての成立も、仮に一五才

でまとめ写したとすれば、一八六四年ごろのものとなり、限定されることになる。

148 公主 皇帝之太子也 「ナシ」

※宮良当壮氏は疑問符をつけて、底本の判読不明箇所を「太」としたが、これは意味からみて「女」がよい。公主は皇女のことである。ちなみに琉球王の王女は「翁主」という。

149 丈人 常人之岳親也 「△ッターリー(タイレン即ち大人の転) (下略)」

※岳親というより岳父つまり妻の父親のことである。母親は丈母という。「南山俗語」に「シウトニ向テ」「丈人」というとある。丈人丈母は久米村の「嘉徳堂規模帳」にも出ている。また父親にはターリーという。ッターリーは聞かず。

150 侄児 兄弟之子 「甥 △キ (中略) 姪 △ミー(下略)」

※侄は姪に同じ。侄は女子の兄弟の子(男女、つまりめい・おい)をいう。方言では男女ともミックワ(姪子)という。

【沖繩語辞典】には、ウキ(甥)とかウキミックワ(甥子)という語が見えるが今日では耳遠い。

151 侄婦 侄之妻 「△キーヌトゥジ(甥の刀自)(下略)」

※右にのべたようにウキ(甥)の語があまり使われなく、言うとなれば、ミックワヌ・トゥジであろう。

151 乾児 ヤシナイクワ 「略」

※乾児は、名義上の子、あるいは養子のこと。方言ではヤシナイングワ。このヤシナイングワはヤシナイウヤ(養い親)に対するもので、今でもまれには、子どもが体が弱いと養い親(男女)を持たせるとよいというので、名目上の親子になることがある。養子はヨーシという。本土古語の「養い子」は養子のこと。したがって若干ずれがある。

159 媳婦 子之妻也 「△ワッターユミ(私の家の嫁の義)」

※単にユミ(嫁)で充分だろう。さらに長男の嫁をチャクシ・ユミ(嫡子嫁)、次男の嫁をジナン・ユミ(次男嫁)という具合に区別する。

160 自己 ナシ 「△ワヌ(下略)」

※ワンという。ワヌを聞かず。

160 塞荆 自言妻也 「△ワーガトウヂ(吾が刀自の義) (下略)」

※ワン・トゥジ、ワー・トゥジあるいは単にトゥジという。塞荆は妻の卑称。

167 頭角 カタカマチ 「旧琉球男子の髪結び方を云ふか。(下略)」

※カタカマチに相当する語を現在聞くことができない。漢語の頭角は頭の上を言うことばで、頭角を露すといういいかたがこれである。現在の中国語でも同じ。カマチは頭を意味するので、カタカマチはそれを翻訳したものか。

167 頭後 ウシルクブ 「名護方言。(中略) 後窪の義であらう」

※首里・那覇でもウシルクブまたはウシヌクブという。後頭部下の窪のこと。一六八頁の「脳坑 ウシルクブ」も同じ。

168 枕骨 マクラグヲホ 「ナシ」

※現在の方言音に直すとマックッ・グーフとなるところだが、この語を聞かない。グーフはこぶの意。後頭部のこぶ状の尖起をいうか。ただし枕骨は、医学用語の大後頭孔に相当し、脳から脊髓に通ずる底部の孔のことをいう。

168 脳蓋 上全 「ナシ」

※上全は「ビヨルキ」で、方言でビュールチという。ひよめきのこと。同頁の「額門 ビヨルキ」に同じ。しかし頭蓋は頭蓋と思われるので、若干意味がづれるか。

168 脳門 上全 「ナシ」

※上全は、これも右と同じくビュールチのこと。しかし脳門子はひたいをいうので、これも若干意味がづれているか。

168 鬢毛 ビンタ 「ナシ」

※漢字はビンタギ(鬢毛)とあるべきものであろう。ビンタは鬢の下あたりである。

169 辮子 ヒラガン 「△ヒラグミ(平組の義)(下略)」

※「唐やヒラガン」とも言うように、辮子は清朝満州族の辮髪のこと。またいっばんに女学生の三つ編みなどもヒラガンという。

170 眉毛 マヨ 「○マヨー △○マユ (下略)」

※マユでも良いが、ふつうはミーマユという。なお眉毛にはマチギ(まつげ)の意もある。

170 眼涙 ミイノナラ 「ミイヌナラの転。(下略)」

※これもふつうはミイナラ、ミイナダという。涙のこと。

171 拳頭 テイツクン 「△ティージクン (中略) 拳固を云ふ」

※ティージクンという。三二二頁にも「拳頭 テズクン」とある、これも同じ。

171 弾手 テイハンク 「略」

※手を弾くこと。ティーハンチュン。

172 脚面 ヒシヤノワタ 「足の裏を云ふ。ヒシヤはヒサ(足)を雅言的に云へるもの。(下略)」

※ヒシヤヌ・ワタ(足の裏)。ヒサ(足)をヒシヤというのはサの前のイ母音による口蓋化。掌をティーヌ・ワタという。

173 舌頭 シタ 「△シチャ (下略)」

※シタは本土語。方言ではシバという。シチャは聞かず。舌のことを現在の中国でも舌頭という。173 牙齒 チイバ ハア 「チイバはチーバ即ちキバ(牙)の転。(下略)」

※チーバは糸切り歯つまり犬歯のこと。中国語の牙齒は単にハ一(齒)の意もある。

173 大牙 ウクバ 「ウクバと云ふ。奥歯の義。(下略)」

※ウークバー(奥歯)という。

173 小牙 マイバ 「マイバといふ。前歯の義。(下略)」

※メーバー(前歯)という。

174 地閣 ウトガエ 「オトガヒ(頤)の訛。△ウトウゲ一 (下略)」

※地閣は現代中国語ではあごのこと。

174 腮帮 カクジ 「略」

※カクジはあごのこと。現代中国語で腮帮子(ほほ(頰)のこと。訳にそこがあるか。

175 胸膈 ウトス 「△ウトウシ」

※ウトウシは、みぞおち、つまり鳩尾のこと。

177 小腿 コンダ 「クンダと云ふ。コンラの転。コムラ(腓)から漸次転化したものである。」

※現中国語では小腿はすねを意味している。次の腿肚のほうは、ふくらはぎを意味している。

180 瘡瘡 カウス シキゴチャハ 「△コーシ (下略)」

※コーシは疥癬のこと。シチは湿気とも表記した化膿性の皮膚病のこと。本土語では「しっけ」と言つて梅毒をいった。グチャファは、円にひろがるぜきたむし、ぜにがさのこと。

181 疔瘡 ヤコビヤウ 「ヤクビヤウ(厄病)であらう。除き難き病氣」

※本土古語ヤクビヤウ(厄病)は疫病・流行病のこと。疔は慢性胃腸病のことで、琉語と漢語と  
かみ合わない。また瘡は病の誤りか。

182 汗癩 シラバイ 「白癩ひで、汗を拭きとらないために出来る皮膚疾患である。(下略)」

※シラペーは、私どもは頭にできる白い皮膚病、つまりシラクモ(白雲)のことで、いわゆる白  
癩のことである。「沖繩語辞典」では顔に出来る白ナマズのこととする。汗を拭きとらないで  
出来る皮膚病というのはアセモのことであろう。汗癩は中国語ではアセモをいみしている。

182 痰呼 ヒミキ 「ナシ」

※ヒミキは喘息のこと。喘息でないまでもゼーゼーすることをヒミチという。痰呼の語が何かわ  
からないが、近い発音に痰惑がある。これは痰がからむ病氣のこと。喘息とはかぎらない。

183 舌根 シタノ子イ 「△シチャヌニー (下略)」

※本土語の「したのね」を写したものの。方言ではシバヌ・ニといふべきもの。

183 痢病 リイビウフ シボエハタ 「略」

※リビョー(痢病)、シブイワタ(搾り腹)。痢病は単に下痢のこと。シブイワタは、赤痢や疫痢  
のような腹をしぼられるような下痢をいう。

183 虚腫 シナボコエ 「ムナブクレ(空腹)の義」

※意味もなくふくれる、はれる意。シナブツキ。

185 瞎眼 ミクワ 「ミククワ (盲)」

※ミククワは「めくら」(盲)の転。まくら(枕)をマククワ、やぐら(屋倉)をヤククワと  
いうように、「くら」がクワに変化することがある。三六三頁に「瞎子 メクワ」とあるのも  
同じ。中国語としては瞎眼より瞎子がいつぱん的。

186 刷牙 ハンザキヤア ハアサル 「ハンザキヤウは歯を磨くものか。ハアサルは歯漁るにて、歯の  
間に挟まれ、残れる物を除き取ることであらう」

※表記からするとヤハー・ンジャチャー、ハー・アサル→ハー・アサユンというべきもの。現中  
国語では牙刷子はハブラシのこと。

186 癆病 ボラヒ 「肺結核。ロービョー、ローガなどと云ふ」

※肺結核はほかにフィーロー(肺癆)とかタンヤンメー(痰病)などといわれ、この癆病もそ  
れかと思われるが、ボラヒは、思い当たるものがなく、これとは別に、色気遣い・色情狂の男  
に言うブライーが考えられる。なぜ癆病をボラヒとするかわからない。

187 看病 ミイマエ 「ミイマエはミマヒ(見舞)の意味で、病家を訪ふことである。(下略)」

※現中国語では「看病」は診察する意がある。

187 治病 ヤウジャウ 「養生の義。治病は直接に言へば〇ヤマイノーシイン(病なほす)といふべき

である」

※治病は現中国語で治療する意がある。養生にもその意がある。ヨージョー・スンという。

189 脚底板 ヒシヤノウラ 「ヒシヤ(足)の裏の義。△ヒシヤヌウラ (下略)」

※琉和折衷のことば。ふつうヒシヤヌ・ワタという。一七二頁に「脚面 ヒシヤノウラ」とある。

192 西国米 シイヤカクビ 「略」

※「琉球官話集」補注追勘、「琉球官話集」補注追考」にも書いたが、新たに追記する。貝原  
益軒の「大和本草」(一七〇八年刊)巻四穀類の「沙菰米」のところに、典籍便覧に云う、沙  
菰米は樹皮が中国の葛根に似て、搗浸して澄濾し、粉を取って丸を作り、菘豆の大きさにして  
晒乾して之を売る。食べられる。マラッカ国から出る。わが国では「さんごへい」と言う。俗  
に西国米、西国米などと書くのは間違っている。煮熟して食べられる。下痢止めにきく。本草  
二十三巻にある菰米も同じ、とある(原文は漢文まじり、筆者が意訳した)。

小野蘭山の益軒の右書を批判した「大和本草批正天之巻」の「沙菰米」には、

本草別集に委し。番国五穀に乏しき地にて、木皮を粉にし丸したる者なり。今も多く来る。

味かろく病人の食ふによし。「国俗さんごべいと云」今はさんごべいと云。「西国米 西国米」  
西国米は漢名なり。通雅正字通に出たり。西国米は和語なり。「本草二十三巻云々」菰米は  
はながつみなり。相同と云は誤なり。



西国米はサゴヤシからとれるデンプンで、サゴはマレイ語で食糧の意がある。これをまるめてあるので米べいという。琉球国由来記卷二「御料理座」の品物の中に「三五米」とあるのもこれである。近世末期ごろの「嘉徳堂規模帳」にも「御吸物(西国米)」、「梔(西国米、竜頭皮、竜頭ふん)などがある(カッコ内は小書)。戦前まで沖縄の行事食に出ていたようである。

195 葛粉 ワラビコジ 「コジはクツ(葛)の誤記で、クツコ(葛粉)の略。炭から採った葛粉の義」  
 ※ワラビコジ。デンプンのことをクジという。例えばシムクジ(芋葛)。「御膳本草」に「炭根粉餅」とあって内容をよくあらわしている。

195 紅袖 アカカウズ 「赤麴の義」

※赤飯をつくる時に入れる紅麴のことで、「御膳本草」に「紅曲カキキョク」とある。

205 魚飯 シ、ミシ 「ナシ」

※琉球料理にはすしはないが、すしめし(鮭飯)であろう。

207 豆干 カンタヲホ 「カントーフ(寒豆腐)である。高野豆腐など」

※焼き豆腐のこと。明治期の風俗絵などに携帯の地炉(素焼)などで豆腐を焼いているのが見られる。しかし元来は高野豆腐のようなものだったのだろう。「和漢精進料理抄」(元禄十年刊)にも「豆腐干」とある。

207 豆醬 マアミ、ソ 「△マミー・ンス(マメミソの転) (下略)」

※現中国語ではみそと言え「豆醬」という。

207 清醬 シヤウヨ 「シヨウユといふ。(下略)」

※シヨウユまたはソーユウという。

208 茶油 ツバチアンラ 「△ツバチ・アンラ (下略)」

※チバチ・アンラ。椿のことを中国では山茶花または茶花といいこれからとれる油を茶油という。ふつうはカタシ・ユ、カタシ・アンラといい、とくに女性の髪油とした。

208 香油 ウグマアンダ 「△ウグマアンダ 御胡麻油の義。(下略)」

※ウグマは黒ゴマのこと。香油は現在の中国語でもゴマ油をいう。

208 麻油 マアヨ マア、ンラ 「ナシ」

※現在のマアアンラは真油の義で、種子油のこと。麻油は芝麻油シマアブの意だろう。これを音で解したのがマアユか。

208 番椒 上全 「ナシ」

※上全とは右にある「胡椒 ケン」の「ケン」に同じという意味。胡椒は現在でも中国ではコショウを意味している。しかし番椒は「御膳本草」にも「カウライゴセウ」とあって、これはとうがらしのこと。カウライゴセウは高麗胡椒で、コーレーグスという。現在ではグスとだけ使う例はない。

208 花椒 クヲリヤイグソ 「恐らく△コーレーグス（高麗胡椒の義）の誤記であらう。唐辛子を云ふ。（下略）」

※現在の中国では花椒はさんしょうのことをいう。したがって誤解と思われるが、二八九頁にも同様の記述がある。

210 蔓菁 カボ ニリノルイ 「カボはカブ（蕪）の誤記。△カブラ △ンディー」

※方言ではかぶら菜や蕪をンディーといってカブラを聞かない。『混効験集』（一七二一年）にも蕪を「うむでい」というとある。奄美あたりではウデーというらしい。益軒の「大和本草」には蔓菁を「薩州にておどいかぶといふ」とある。ンディーはこの「おどい」から出たものようである。したがってニリノルイは「ンディーの類」。

210 菜頭 インリ 「ナシ」

※インリは右の「ンリ」に同じと思われるが菜頭の中国語がわからない。

210 瓜菜 ケウイ 「胡瓜であらう。△キウイ （下略）」

※三六〇頁にも「菜瓜 ケエウエ」とある。しかし菜瓜はシロウリのことであらう。

211 茼蒿菜 ションキク 「春菊である。△シンチク （下略）」

※春菊はシュンチクまたはスンチクという。

214 天亮 ヨヲアキル 「△ユー・アキ 夜明けの義。動詞の場合は△ユー・アキーン（夜明く）、

△ユー・アキユン（夜明ける）（下略）」

※名詞形だとユアキで、日常語というより文語的ことば。ふつうはアカチチ（あかつき）をつかう。動詞形だとユヌ・アキユン（夜が明ける）という。天亮は現在中国語でも夜明けの意に使っている。

214 清早 ストメテ 「（上略）△シティミティ」

※申叔舟の『海東諸国記』にも「清早」をストミティ（諺文）とよんでいる。早朝の意。

214 早上（略） 「ナシ」

※「二字」に「ストメテ」とある。早上は現在も使われている。

214 早晨（略） 「ナシ」

※「二字」に「ストメテ」とある。この早晨も現在つかわれている。

214 黄昏 クレカタ 「標準語のタンガレで、物のあやめもわからぬ頃である。△アコークロー。（下略）」

※クレカタはくれがた（暮れ方）で本土語である。新本家本に「ヨサンテ」とある。これはユサンディで、本土古語の「タさり」の変化したものである。アコークローは宮良氏が夕方暮の意であげであるが、宮崎県や熊本県でも「あこーくろ」とつかわれ、鹿児島県でも「あこくろ」と「あこくろんも」とつかわれている。

215 黒夜 ヤミノヨ 「△ヤミノユル ヨーンヌユー」

※ヤミノ・ユー（闇の夜）という。「南山俗語」で「ヤミヨ」、「海東諸国記」で「ユル」（夜）と読んでいる。

215 月亮 与上同 「ナシ」

※上と同じとある「上」は「亮夜 チ（キ）キノヨ」（カッコ内の「キ」は宮良氏が挿入したものであるもので、つまり「チキノヨ」とあるものである。宮良氏はこれをチチヌユルとしているが、チチヌユルとかチチヌユーという。表記はこのチチヌユーをうつしたものである。さて月亮は月夜というより、現中国語では月そのものをさす。五三六頁に「月亮上了 チツノアガル」とある。チツノアガルはチチヌ・アガル（月が上る）で、この例を見ても月亮は月を意味している。

217 後年 ニヤンキヨ 「△ナー・ンチチュの誤りである。（下略）」

※後年は再来年、明後年のこと。方言ではナーンチチュまたはナーヤーンという。

220 傍辺 ソバ 「何れもスバと言ふ。また△ファタ （下略）」

※スバは側のこと。端<sup>はた</sup>をハタという。「二字」には「カタハラ」とある。これはカタハラとい、本土語の「かたはら」（傍ら・側）から出た語である。

224 争口 ヨロジヤ 相争角口 「略」

※「二字官話」にも「ヨヂヘヨン」とある。同頁底本の本項の次の「争論」にも「上全 相争論」とある。「二字官話」はこれにも「ヨヂイヨン」とある。今日まったく耳遠くなって、この語を知る人もほとんどいないが、官話集ではほかに「相罵 ヨウサイスルクト」（二八〇頁）とあり、同箇所の新本家本が「ヨウザイ」「ヨザイ」、「二字官話」が「ヨヲザイスル事」と疏語がつけられている。言い争う意であることはそれらの漢語で一目瞭然である。また他に三八六頁に「対口ヨザヤ」とある。これらの例からすると、ユーザイ<sup>ユイ</sup>かユザイ<sup>ユイ</sup>とその動詞形、ユーザヤー<sup>ユイ</sup>かユザヤー<sup>ユイ</sup>（人をさす）などと発音され、あるいはコト（事）をつけた名詞形などがあつたらしい。

かつて琉球の賤民集団が持ち歩いた念仏歌謡の一つ「天神世界」に、

いかなる人とも喧嘩すな

口事よざい事しよらとめば

後生世のながやにかゝるべし

……………（念仏集） 同治十一年写本）

同じ歌であるが、山内盛彬の『琉球王朝古謡秘曲の研究』には「天じん四界」という名で、

百十もよの人とも喧嘩けんぱすな

喧嘩けんぱ余よざいごとすらとめば

後生世ごせいせいの中から道にかかていく

.....

「口事クチゴトウ」(クチゴトウ)も言い争う意で、同意の語「よざい」を重ねて使った例である。「奄美方言分類辞典」にも、言い争う意で、ヨザイ、ヨザウリが出ている。ということは、たんねんに捜せばまだ聞けることばかも知れない。

224料理 トリサバケ クトカモル 「○ポーザーシイン(庖丁す) (下略)」

※トリサバケは方言読みするとトゥイサバキとなる。トゥイ(取り)は接頭語。動詞サバチュンは揃けずる意、また裁判する意があるが、ここでは本土語に見られる処理する意。クトカモルは事柄を構う意で始末する管理すること。つまり中国語の料理には料理する意はなく、整える、処理する、始末する意である。料理するは、「做菜」という。

225作戯 ハンセスル 「略」

※新本家本、「二字」とも「ハンシスル」になっている。このハンシはバンジと思われ、前回「琉球官話集」補注追勘(『琉球大学法文学部紀要』三三三号「国文学論集」一九九〇年三月)では、「語源ははっきりしないが、演劇を意味する椰子戯から出たのではないかとしておいた。

今これをすぐ撤回する必要はないが、真境名安興の『沖縄一千年史』に、琉球国王の代替りごとに来琉する冊封使歎待に関する資料の中に「勅使宿へ国王両度被ニ罷出一候、一度は封王の礼、此度は勅使より饗応有レ之、班戯と申舞形共被ニ申付一候」(一〇六頁)とある。勅使とは冊封使でその宿舎である那覇の天使館へ国王が冊封の礼の御礼のため下り、そこで「班戯」が上演されると述べられている。班戯は班ジュ子戯ジのこと、つまり発音椰子と同じ。班子は劇団のこと、班戯はその芸能のことである。内容は中国の劇や踊り、歌曲・楽曲であったはずである。

227寄信 ジヨウモタスル事 「△タユイ・スン (下略)」

※ジョー・ムタスルクトウ(扶持たすこと)である。新本家本には「ジウタノモ」「ジウアツライ」「二字」には「書上アツラヨル事」とある。「ジウ」はジョーの表記、「タノモ」はタヌム(頼む)、「アツラヨル」はアチレーユン(訴える)で注文する、依頼する意。「書上」は書状の誤字であろう。つまり方言のほうは手紙を頼んで届けてもらう意である。しかし寄信は現代中国では手紙を出す意である。

228放心 コ、ルヨルキヤン 「ククル(心)・ユルシエーン(弛しあり)」

※ククル・ユルキヤンという。安心する意。心配が放はなける意で中国語でも放心は安心する意である。本土古語でも「ゆるす」は放す意がある。

230 借債 (略) 同上 「ナシ」

※新本家本「スイカタフン」、「二字」は「シイノアン」とある。シーは負債・借金のごとで債からの転。シー・カトーン(債・借りにいる)、シーヌ・アン(債がある)。

230 還債 スイヒンベン 還人家銀子 「ウカ・カイシイン(借金返す)。ヒンベンは返弁である。ヒンビンと云ふ」

※シー・ヒンビン(償・返弁)。宮良氏が指摘するようにウッカ(負荷)ともいう。これを返済することを、シー・バレー(償払い)、ウッカ・バレー(負荷払い)という。新本家本には「スイハラヨン」とあり、「官話集」ではいったいに「シー」が使われ、なぜか「ウッカ」はない。

233 千万 (略) タンテ 「○タンディ(何卒)」

※那覇でもタンディといい、どうか、といった、物を頼むときに言う。中国の千万も、ぜひとも、くれぐれもの意がある。

233 寧可 トッテン 同上 「ナシ」

※上に「率性 トッテン」とあり、宮良氏は「○ドーディン(何卒)」としている。同頁「寧索」にも「トッテン」とある。組踊「手水の縁」で、玉津に求婚して断られ「とても此処をとて我身や捨てら」(いっそこ)で我が身を捨てよう「死のう」というくだりがある。この「トッ

テン」はこの「とても」と同じ語と思われる。中国語の寧可にも、いっせ、むしろの意がある。このあたり新本家本、「二字」とも「トテン」「トラテン」である。とすると「トッテン」は「トラテン」の誤字かそれともトゥッティンという発音があったかどちらかであろう。

244 要緊 カンニヨ 「肝要である。カンニューと云ふ。大事な物をカンニュー・ヌ・ムヌと云ふ」

※カンヌーという。カンニューは聞かない。

246 便飯 チニノモノ メシツケ 「常の物、飯付けであらう。(下略)」

※便飯は中国語で日常の食事、ありあわせの食事のことである。したがってチニノモノはチニヌ・ムン(常の物)で、このムンは食事のことになる。新本家本は「ジボンメシ」、「二字」には「ツニノモノ」とある。シボンメシはジボン(ヌ)ミシで時分の三度の飯で、ツニノモノは常の物の表記である。メシツケはメシツケで、飯をつけということであろう。これは、飯を使わずの訳のつもりか。

247 多費 テラエテ ムノイリ 「テラエテはティダイティで、物品の提供即ちおごって云ふことである。(下略)」

※テラエテはティデーティという。ごちそうして、もてなして、の意。ムノイリはムヌイリ(物入り)で多費に相当するが、ティデーティはどうだろうか。

250 洗臉 ツラアラアル 「臉は洗ふ」である。△チラ・アラーイン (下略)」

※臉は臉に同じ。まぶたのことだが、俗に顔のこと。したがって洗臉は顔を洗うこと。ただし洗臉とはかかない。ツラアラアルは大和口的琉語、チラ・アラユンという。

251出恭 クツルギ 「○クツルゲン(寛ろぐ)の名詞形。(下略)」

※現在の中国語では排便する意があり、出大恭(大便する)、出小恭(小便)するとつかう。新本家本には「ホルエル事」とあり、これはフル・イール・クトゥで、便所に入る事の意であろう。この項の次に「解手」(小便する、便所へ行く)があるのも、この語句とかわりがある。

256起播 カクエシル事 「不明。かこひ(囲)することか。△カクイ・スン (下略)」

※「二字」に「カゲホキヨル事、ツツメウト」とある。これはガク・フチュルクトゥ(楽を吹くこと)、チジミウツ(鼓打つ)である。新本家本は「カグツツメウチョン」とある。これはガク・チジミウチュン(楽・鼓打つ)である。とすると「カクエシル事」は楽をすること、であろう。楽は中国音楽のことである。牛角・哨呐といった吹奏楽器がその代表である。その演奏する音楽を「起播」というのであろう。二八三頁にも「発播 カグエシル カグツジンスメル」とある。カグツジンスメルはガク・チジン・シメル(楽・鼓させる)の意であらう。

257到底 ツイニ 「遂に」であらう。(中略)「到底」は△イチャーシン(如何にしても)(下略)」

※中国語の「到底」は、いったい、いったいせんたい、結局のところの意。ツイニは、組踊「執

心鐘入」に鬼女に追われた若松が末吉の寺へかけ込み、救助を求めるくだりで「頼まほつひにこのお寺」というところがある。しかし日常語ではあまり使わない。宮良氏の提示したイチャーシンはチャーシンがよい。

262取咲 アザハリヤイ ザリグト 「あざわらひ(嘲笑)、ざれごと(戲言)であらう。△ツチュ・ワレーイン(人を笑ふ) (下略)」

※アジャワレー(あざわらい)、ジャリグトゥ(ざれごと)と発音する。取咲は中国では、冗談をいう、からかう、笑いものにする、意がある。

265乖巧 (略) ソヨメエ タクマナモノ 聡明伶俐の人 「△○スミー(聡明)(下略)」

※利口者の意でタクマー、タクマチラー、タクマチリンとはいうが、タクマナムンということばを聞かず。おそらく大和口的琉語であらう。現中国語でも、はしこい、さとい、機転がきく意のほか、気に入られる、人に好かれるの意もある。新本家本には、「ヤナモノ、ヒンキモノ」「タクマシイモノ」とある。ヤナムンは悪者、ヒンジムンは不良を意味し、「タクマシイモノ」は「タクマ」を形容的に働かせたもので、むろん方言にはないものである。タクマは悪い方に小賢しい意もあるので、新本家本は「乖巧」を全体に悪く考えているようである。

269愚蠢 ボクウナモノ 「△ブクラーナムヌ(巧ならざる者、愚鈍なる者)」

※ブクラー・ムン(不巧な者)は器用ではない者、のろま程度のものだが、中国語の愚蠢は、と

んま、まぬけ、愚か者をいう。三〇三頁に「蠢頑 ナマボリモン」とある（本書二二六頁參照）。

269 嘔吐 モノハキヤサ モノハク 「物吐き易さ、物吐く、である。（下略）」

※ムヌハチャサは物を吐いたよ、の意。ムヌ・ハチュンという。

270 令着 トツケル 「△トウチキユン」（下略）」

※トウジキーン、トウジキユンであろう。言いつける、命令する、意。

271 撩撥 （略） ルウキスル 以手指撥動也 「△ハンチュン（弾く）（下略）」

※新本家本には「リウジナモノ」とある。これからすると、リュージスン、ルージスンとよむべきものである。リュージ、ルージは「聊爾」で、失礼なこと、ぶしつけなこと、軽はずみなこととの意。撩撥は現代中国語では唆す、怒らせる、かきたてる、挑発する意。失礼なことをして相手を怒らせる意で聊爾をつかっているようである。同頁「唐突」もこれと同じとするが、これも現在の中国語で、失礼する、逆らうの意があるからである。

271 忌憚 （略） キラアル 「キラハル（嫌はる）であらう。△キラワリン （略）嫌ふは△キラユン（下略）」

※キラアルは例によって大和口的表記。嫌うはチラユンという。新本家本には「キライ」とあるがこれはチラインか。なお新本家本では忌憚の憚が「諱」になっている。

272 遮着 （略） ツギル ホニツギヨス 「不明」

※チジュン（接ぐ）、フニチジュン（骨接ぐ）であろう。

274 雷响 （略） カンミヤヘノナル 「カンミヤヘはカミナリ（雷）の古い雅語的書き言葉であらう。今の方言では△カミナイヌナユン（雷が鳴る）（下略）」

※カンナイヌ・ナユン（又はナイン）という。国頭方言にハンニヤイとあることを考えるとカンミヤヘのミは二の誤字と思える。カミナリのミのイ母音によって、カミニヤイの時期があり、これが後世まで残りカンニヤイ→カンナイになったのではないのだろうか。响は響の簡体字。

274 大家 ソウヤウ 「略」

※前出の「大夥 ソラヤウ」とともに、現在も使われていて「皆さま」「皆さま」と全体によびけることばとして使われている。

275 剃頭 ナカゾリ ソルクト 「ナカゾリは中剃で、頭髮全部を剃るのでは無く、昔片髻と云ふ琉球

男子の結髪する場合に、頭の中央部を剃る風習があった。ソルクトは「剃ること」と云ふこと」

※剃頭は剃髪に同じく頭髪を剃ること。僧侶のように剃る場合もいうのであらうが、中国の男子の結髪の場合にもするように、たとえば琉球のナカズイ（中剃り）に相当するということであらう。ソルクトも、剃ることではなく、するこゝとで、つまり中剃りすることの意であると思われる。

275 嬖娘 ソリヨバ 「ソリは俗に『尾類』と書いてズーリと云ふ（下略）」

※遊女のことを、ズリまたはジュリという。

275 忘命 ステミ 「『棄て身』で、命を投げ出すこと」

※忘命とは、命がけでやる、破れかぶれでやるの意。亡命に同じ。ステミは本土語、教養語であろう。方言では使わない。捨て身。

276 停会 ウキヨルメ 「置くこと、止めること」

※新本家本には「ニヤヒンニイカ」、「二字」には「ネエカ」とある。ニヤヒンニイカは、ナヒンニッカで、もつと遅くの意、ネエカはニッカ（遅く）である。停会は中国語では、しばらくして、しばらくするの意。このニッカは、これからすると、しばらく時間をとる意のようである。「ウキヨルメ」は未詳。

281 明亮 スキトヲル 「透き徹る」

※現在の中国語では、（月が）明るい意に用いる。スキトヲルはそういう意味であろうか。

281 償命 イヤイテ シキリニシメルクト 「命乞ひをすること」

※イヤイテはエーティ（あえて）の表記か。あえて（敢えて）には、押し切って、強引にの意味がある。シキリニシメルクト、しきりに責めることか。

281 抵命 シテミ イヤイテ 「捨身、命を奪ふこと」

※シテメはシティミ（捨身）、イヤイテは右に述べたように「敢へて」であろう。新本家本には「ノチスタア」とある。これはヌチシター（命を捨てる者の義）の表記で、命知らずの者の意である。

282 請談 ウハナシ 「御話」

※「二字」では「構談 ヨキハナシ」とあり、次いで「清談 同」とある。新本家本には「請談」「請談」はなく「清談」に「ウハナシ」と振られている。したがって「請談」は「清談」である可能性があり、この方が「ウフアナシ」（御話）という話の敬語に合っている。

282 提調 サ、ズル 「ササグル（捧）の誤記であらう」

※「二字」は「ヨウシンスル事」とある。用心することであろう。五三三頁「自家去提調」に新本家本は「ドウシヤインジサシジシヨン」とある。これは、ドウシヤイー・ンジ・サシジ・シユンで、自分で行って指図する、意である。こちらの「サ、ズル」はこの例からすると「サス、スル」といったものだったと思われる、指図する意になる。この提調は、現代中国でも配置・あんばいを指図する意である。ここもそのつもりであろう。

282 糊房 ヤアハヨン イエホツヨルクト 「家を張る、家を立てる義か」

※糊房は部屋中に壁紙を張る意であるらしい。糊窓（まじりに紙を張る）、糊牆（壁紙を張る）の語は使われているが、糊房はない。とするとイエホツヨルクト（イー・フチュルクトウ、家葺く



こと)は少し遠いか。あるいは下が正しいとすれば、ヤアハヨンはヤー・ハ(ジ)ユンで、船や矢を作る意のハグ(作る)であるかも知れない。

283 周囲 マンマル 「○マーリイ(周囲)」

※マンマルは本土語の「まんまる」(まん丸)であろう。方言ではマンマル(周囲)という。新本家本には「ソウカクイ」(総囲い)とある。ソーガクイは総てまわりが囲われている状態をいう。

283 塔鼻 ハナスヒイラ 「ハナシビラー(鼻梁の潰れた者)の義であらう。塔は搭か」

※中国語では塔(タ)を生かして言うとはなべちやを塌鼻(子)という。塔鼻の熟語はない。ハナシビラーという琉語も聞かず。ふつうはハナビラーという。背丈の低い人をやや悪くいうとき、シビラーということがある。

283 没鼻 ハナモノアモフ 「鼻の無いことか」

※「ハナモ」と「ノアモフ」と二つからなっているのである。ハナモは鼻のない者、耳のない者はミミモ、という。ノアモフはノー・モか。小児語で花のことをノーノーという。しかしこの語が単なる小児語と思えないのは、稲穂のことを菩薩花ぼさつわなと古謡(神謡)でいっていることからもわかる。鼻をノーといった例は知らないが、鼻を意味していて、やはり鼻が無いという意味であろう。新本家本にも「ハナ、シ」とある。

285 照影 カジ 「カギの誤記。蔭。影。△カキギ (下略)」

※カゲ↓カギと変化しているために「カゲ」「カギ」はありうるが「カジ」は解せない。教養語だったためにカギがカジに変化しているものと誤解したための表記かと思われる。新本家本「カタカ」とある。カタカはテーダ・カタカ(日よけ)とも使われ、どちらかというときさへざるものの意。

285 生児 ハンギヤウシヤン 「ハンジヤウシヤンの誤記。繁昌した。子が生まれた。△クワー(子良)ンマリタン(生れた)(下略)」

※ハンジョー(繁盛)は出産・分娩の意。ハンジョーする、で対島・宮崎・鹿児島でも使われ、今では少し耳どおくなったが那覇あたりでも、ハンジョー・スンといった。石垣でもパンジョー・シユンといていたはずである。今日ではふつうクワ・ナスン(子産す)という。

285 菜刀 ハラキヤ 「ハー・キヤー(葉を切る物)の義。但し菜刀は菜切庖丁であるからナー・キヤー(葉を切る物)と云ふべきである。」

※中国語の菜刀は単に包丁のことで、従ってハラキヤは方言のホーチャー(包丁)をうつしたものである。

286 抓痒 ラエガウサ 「(上略)△ッキーゴーサーン(下略)」

※ライ(w)ーゴーサーンと言うらしいが『沖縄語辞典』が、私どもはキーゴーサーンになって

いる。宮良氏は「語頭は喉頭破音」としているが、思い違いである。抓痒は、かゆみを搔く意がある。

287 説破 イエヤンタン 「イーヤンジュン。云ひ破るの義」

※イーヤンタンは言い破った、になる。言ったことが悪い結果をひきおこした時にこういう。ただし中国語の説破は、打ち明けて言う意で、意味にずれがあるように思える。ことばで暴露する、すっぱ抜く、はっきり言う意の「説穿」のほうが近い。

287 和調 キンラメ 「ツルダミ(つるだめ、絞矯)の誤転せるものか」

※つるだめ(絞試)で、チンダミという。キンラメはこれを写したものの。

287 蟬螂 アサ、ア 「蟬。△アササー、シエーシエー(下略)」

※シエーシエーを聞かず。蟬は鳴き声からサンサナー、ジーワジーワ、ジージャー、ナーピカチカチなどがある。「せみ」がついたシーミーグワー(にいにいぜみ)というのもある(沖縄語辞典)。

288 八脚 ヒヤアン 「南京虫の沖縄方言 (下略)」

※ヒヤアンはヒヤーンで毛じらみのこと。一七九頁にも「烏蟿 ヒヤアン」とある。

289 虻子 ギキヤシ 「略」

※ギキヤシはジチャシでしらみの卵のこと。中国語の虻子と同じ。虻は蟻の簡体。

290 竹排 タケイカラ 「竹筏か」

※排は列や並びの意で、転じて竹の筏になる。しいて方言よみするとタキ・イカダになる。「二字」は「タキマシ」としてあるが、これは竹籬たけまきのことである。籬は庭の植込みの周囲に設ける低い柵のことである。

290 木排 ケイカラ 「木筏か」

※これもしいて言うときーイカダになる。中国語では貯木場や川に並べてある木材、それに木の筏にいう。「二字」には「キイマシ」とある。これも木籬である。木を並べて柵としてあるのでこうした訳になったようである。

292 対頭 仇家也 テキ 「敵」

※現在の中国語では、かたき、相手、の意。底本は「タイスル」(対する)を消してある。「二字」には「タイミンスル」(対面する)、「アラソヲ」(争う)としているが、名詞である。

293 鎖門 モンサアシリ、 「サアシはサシ(差し)で、錠を云ふ。(下略)」

※ムン・サーシ・イリリ(門に錠を入れよ)。サーシは宮良氏の言うように「さし」(差し、鎖し)から出たものである。「ムン」(門)は本土語で文学作品に使われている。門はジョーという。

294 穿着 ツンチョン キリ 「上は△チンチュン (下略)」

※チン・チユン（衣着る）である。

295 雖然 □トエ 「タトビ（仮令）【副詞】」

※漢文の、然ると言えども、にだいたい同じ。（……ではある）けれども、たとえ……でも、の意。「タトビ」もその意である。「二字」の「アンソルヘキ」（アン・スル・ピチ、そうすべき）は若干意がづれている。

296 九曲 クモンズ 「九文字か」

※「二字」には「イナツマ」とある。五四三頁には「万字画 イナズマ」とある。おそらくこれは、今日雷文とよばれるものに近いもので、卍（まんじ）を直角にまげながら連続する紋様のことで、これが「九」にも似ているので「九文字」ともよばれたのであろう。

299 儼什 カズカズ シタナサ トヤアガヤア ミイズコラス 「シタナサはきたなざ（汚、穢）、カズカズは数々、屢々で、その他は不明であるが、疊語であるから、或はミーミ・カーミ（目々、孔々、隅々）の如く限なき意を表はすものか」

※ミージ・クージは、あれこれ細かい点をほじくり出して言う時に使う。トヤアガヤアはあまり聞かないが、とやかくと同じく、あれやこれやと細々したことの意であらう。

299 啗皮 カワノワタスキトル 「皮の衣を着てゐるの義か」

※新本家本には「カアハギユン」（カー・ハジユン、皮を剥ぐ）とある。「カワノワタ」は植物動

物によらず皮の内側のやわらかいところのこと。スキトルはそぎとる（削ぎとる）、である。

300 海老 イビ 「老は龍であらう。えび（海老）△イビ（下略）」

※中国語の海竜はエビを意味しない。海竜はヨージウオ（楊枝魚）のことで、俗にラッコをさすことがある。竜の簡体字はさらに進んで龍と書くことがあるので、老の誤字か、それとも方言訳が誤っているか、どちらかであろう。

301 嬬娜 ナカホズノツヲラサ 「略」

※ナリフジヌ・チラサ（容姿の美しさ）。ナカホズの「カ」は「リ」の誤字。ナリフジは体全体をいう。ナリはみなのなりとかかわりがある。フジは風情か風姿の転であらう。新本家本には「ウツクシクリツハノカタチ」（美しく立派の形）とある。また二六〇頁にも「嬬娜 ナリホズノキヨラサ」とある。

303 蠢頑 ナマポリモン 「生狂人。半狂人」

※ナマプリムン。「二字」に「アルカナモノ」（愚な者）、新本家本に「ボクナモノ」（不巧な者）とある。二六九頁に「愚蠢 ボクウナモノ」とあって、不巧が愚者の意でつかわれていることがわかる。

303 鳥鎗トライテス トエチキ 「鳥を突くものの義。ヤリである。」

※トライテスには誤字か脱字がある。テスを「チ、ス」とすると、トウイ・チチュシ（鳥を突

くもの)となる。トエチキはトウイ・チキで鳥突きである。これはやはり鎗であろう。沖縄では竹竿の先にとりもちをぬって、これで捕った。鳥差しという。

303 銅炮 イスバ 「石火矢即ち石炮であらうか」

※新本家本に「イシビヤ」とある。方言ではイシビヤとかイシヒヤといい、組踊では「イシビヤ」という。イスバは聞かないがさらに進んでイシバとも言ったのかも知れない。銅炮は青銅製の大砲であることを言っている。

304 銅罐 ヤクワン 「葉罐。ブリキ製の湯沸し。」

※ヤックワン。ここは銅製のヤカンのこと。銀製や錫製のヤカンがあり、漢字はこれを書きわけている。

305 背書 ——?ホク「?」

※書物を暗唱することであろう。スラフク、という。

306 汗癩 シラバイ 「白癩(皮膚病) (下略)」

※汗癩の中国語の意はアセモのこと。シラベは宮良博士もいわれるように、しらくものことである。新本家本の「アスポ」が正しい。一七〇頁にも「汗斑 シラバイ」とあるがこれもアセモのことである。

307 南瓜 ナンクワ 「かぼちゃ。(下略)」

※ナンクワ、またはチンクワという。小さい美味しい品種をカブチャーという。

309 対読 キヨガフ 「校合」か

※キヨガフはチューゴーか。チューゴーはしめし合わせることを、協議すること。「二字」には「ツレブク」とある。連れ吹く、で二人いっしょに素読することか。

309 衣仰 チズワタエ 「ナシ」

※新本家本に「ツキハタリ」、「二字」に「ツキハタシ」とある。継ぎ渡し、である。衣仰は現在の中国語では、役目を交代する、引き継ぎするの意がある。チズワタエはチジワタイとよみ、新本家本の如き「継ぎ渡し」の転である。しかし語法から言えば「二字」の「継ぎ渡し」がよい。

311 今児 ナシ 「ナシ」

※今、今日の意。「児」は接尾辞。「二字」に「キヲ」とある。チュー(今日)。

311 児 ナシ 「ナシ」

※□に「明」が入る。「二字」には「アキヤ」とある。アチャー(明日)である。「児」は接尾辞。

312 海角 海辺 「ナシ」

※中国語の「海角」は、みさき、遠いかなたの意。

315 貨郎 ゴモノウヤ 「△グマムヌウヤ(細物売者)」

※小間物をグママンといい、そうした商売をグママン・アチネー（小間物商い）という。中国語でも貨郎は小間物の行商人のこと。

315 矮子 ビクキアラア 低矮之人 「△ピッチャラー（下略）」

※ビクキアラアの「ク」は「ツ」の誤字か。宮良氏も「ツ」と考えている。ピッチャラーはあまり聞いたことがないが、これに近いピッチャラー、ピッチェルは聞いたような気がする。鉛筆がちびた状態をピッチェル・ナトーン（小さくなっている）といった。

316 癩子 ?——ヤ 麻風者 「癩病患者。△クンチャー（下略）」

※中国語の「癩子」は しろくも頭の人のこと。

316 胖子 クハエムノ 肥大也 「△クワイムン（肥え者）（下略）」

※胖子は要するにデブのこと。五五〇頁にも「胖子 肥人也」とある。クハエムノはクエームンを写したものの。クエーヤー、クエートルムン、クエーブターなどの言い方がある。

271 閨棍 ルラズナモノ 「ナシ」

※ルージナ・ムン（聊爾な者）であろう。聊爾は失礼なこと、ぶしつけなこと、軽率なことの意。三七一頁にも「撩撥 ルウキスル」とあり、これに新本家は「ルウジナモノ」としている。

319 魚塘 イヨクモヒ □ヒングワ 「イヨは△イヲ（いを、うを）、クモヒは△クムイ即コモリ（籠）で、△ミジクムイ（ミツコモリ、水籠）と云ひ、池、沼などを云ふ。魚池、魚沼。——ヒングワ

は恐らく△クムイングワ（小池、小沼）であらう。（下略）」

※池、沼、溜池をクムイという。ミジクムイというのはかぶんにして知らない。近世には冊封使の宿舎であった那覇の天使館前に方形の溜池があり、これをイユ・グムイといった。すなわち魚の養殖池である。首里には今の首里支所あたりにリン・グムイ（蓮池）というのがあった。地名に残るトゥンジュムイ（鳥小堀）もゆかりの沼池があったに相違ない。ほかに那覇港の北岸に唐船を係留する、石垣で囲われた船だまりをトーシン・グムイといった。そのほかクムイはどこにでもあって、ウンチエーをわせたりして日用に供していた。□ヒングワは、宮良氏はクムイングワとよまれたが、読める文字をそのまま生かすと、クヒングワか。クヒン、クフィンクヒンは小瓶で中央がふくらんだ小ビンのことである。「港のきよらさな湖平底港」とたえられた名護市許田の湖平底の湖平は小瓶から出たものと言われている。この例は、沼池にも一般にクヒングワと書いていた証拠になるかも知れない。

320 噴嚏 ハナヒル 「鼻放るの義。△ファナフィル（下略）」

※現在の中国語でも「打喷嚏」で、くしゃみするの意になる。ハナ・フィユン、ハナ・ヒーンという。

321 粉墻 モキノエカキ シラヒイ 「（上略）△シラヘー、白墻である」

※漆喰のことをムチという。エカキは本土古語の囲垣のことである。即ち漆喰の塀のこと。シラ

ヒイは当然白癖のことだが、癖は移入語でシラヒーカシルヒーといったかも知れない。

336 門板 □ 「ナシ」  
 ※トレか。三三六頁に「門輪 門ノトリ」とある。トリは首里のトデに同じ。かんぬきや閨門のこと。

336 門窩 即門輪也 ウイザエ 「？」

※ウイザイはイージーの表記か。イージー（飯匙）はしゃもじのことだが、形が似ているところからそうよんだか。

323 拌絞 シマトル 「相撲取る。△シマトウイン」（下略）

※現中国語では摔跤で相撲（をとる）を意味する。「拌」は「摔」の誤りか。

324 背脊 クシボネ 「脊骨。△クシブニ」（下略）

※方言のクシブニはナガニブニとも言い、背骨をさす。ただこの語は、単に背中をいうのである。中国語では背中を「脊背」または「脊梁」という。せはねはそれ故脊骨、脊梁骨というのである。一七六頁に「脊背 クシナガニ」とあるのは正しい。背中はクシともナガニとも、これが合体したクシ・ナガニともいうのである。ただクシブニは腰骨のニュアンスもあつて、腰のあたりの骨をさすこともある。

324 肩膊 カタ 「ナシ」

※肩膊の「膊」は「勝」の誤写か。中国語では肩のことを「肩膀兒」ともいう。

334 両肋 カマク タアツノカマク 「（上略）一般にガマクと云ふ。肋骨には一般にアバラブニ（下略）」

※「カマク」はガマク、「タアツノカマク」はターチヌ・ガマク（二つのガマク）で「両肋」の訳語のつもりであろう。ガマクは腰のもっともくびれているところで、乙女の細腰をハチャー・ガマク（蜂腰）という。両肋の「肋」は肋骨のことと思われるので、ガマクとは異なっている。肋骨のことはソーキ・ブニという。ソーキは全国的に見られる、箆を意味する「しょーき」、「しょけ」「しょけ」と同じものである。

327 勾当 ハレグト 微小計較 做事 タノカソン ヒチタノカソン 「ハレグトは△ワレグトウ（笑ひ事）であらう。又タノカソンは△タヌンガスンで、弛める、緩慢にする義であらう。（下略）」

※ハレグトはハカレグトで「カ」の誤脱したものか。中国語の計較は考え、もくろみの意。事を做すもこれに近い。事を処理する意では、本土古語の勾当にも近い。タノカソンは、タヌカスンまたタヌカシユンで、そそのかす、誘惑するの意がある。ヒチタヌカスンもほぼ同意。タヌンガスンという那覇方言そのものを知らない。

328 手鐲 ウレガニ 「ウディガニ（腕金）か。指輪ならば△イビガニ」（下略）

※那覇方言のウリガニに相当する。ただし手鐲は腕にするのではなく手にするものである。今流に言えばプレスレットのことである。琉球にはこうした装身の風俗はなかったたので、このように訳したのである。指輪はイビガニとはいわず、イービナギーという。

330 問流 上全 ——ナルキイ 「ナシ」

※「二字」に「ドシトメヨシ」とある。ドウシ・トゥメーユシ（友を求め訪ねる）である。どこかに友だちを作って帰って来ない情態をいうか。「二字」はこの次の同じく流刑を意味するとされる。「問徒」にも「ドシトメヨシ」とあつてゐる。

330 小写 カツガエ 「ナシ」

※「二字」に「省画曰小写」とある。たとえば、弌、参を一、二、三（小文字）で書くことをいう。「カツガエ」はカチケー（書き変え）か。三五九頁「省写 カキゲヤ」とある。これも同じく書き変えか。

330 巧写 上全 「ナシ」

※「二字」に「換傍首曰巧写、同画換曰巧写」とある。すなわち部首や画を変えたりすることを巧写というのだとある。「上全」は上つまり前項の「カツガエ」に同じということ。これも書き換えといつてゐる。

331 唔嚙 ボルく 「ナシ」

※食事をする時の擬声語。四四一頁に「唔嚙吃」に、新本家本、「二字」は「ボルくモノカモ」とついている（底本ナシ）。雑炊のことを、そのすする音からポロポロー・ジューシーともいつてゐるように、ボルくムヌカムン（ポロく物食む）も同じかと推し測られる。

333 索蔗 ラジ 「甘蔗。（下略）」

※底本も「紫蔗」とよめるが、「二字」にも「紫蔗 ラシ紫也 出在江西省最多」とある。甘蔗の中には幹が紫のものもあるので、こういつたのだらう。

333 □笋 （不明） 「ナシ」

※「二字」に「竹笋 タケノコウ」とある。竹の子のこと。

335 駝子 (1)ウラバ(2)リヤキ 「(1)はウマか。馬ならば△ンマ、○ンマ。(2)は字音ダシの訛か」

※駝子は背に荷を積む意があるので、(1)はウーファ（背負い、荷負い）である。(2)は中国語のドゥアツツの表記か。

335 研碓 ズレクズ レイズ 「搗粉木、連木であらう。（下略）」

※ズレクズは本土語のすりこぎの表記だから、方言ではシリクジといつたのだらう（ズの濁点はよくある誤り）。「沖縄語辞典」はスルクジという首里方言を採つてゐる。レイズはリージで、連木の方言化したもの。

336 鎌子 ヘエラ 「ヘラ（篋）の義。△フィーラ ○ピラ。除草用の農具で、巾約一寸五分、長さ約

八寸、鉄のものに曲木の柄を取付けたものである」

※フィーラはヒーラといっている。農具の説明はそれでよいが、今日では曲木の柄のところまで鉄製になっている。さて鋏子は現代中国語では、シヨベルや剣先のようになったスコップをいう。「ヘエラ」はこれに近い農具として考えたものであろう。

338 勸農 アボシバリヤイ 「△アブシバレー（畦<sup>むら</sup>払ひの義）（中略） 田の畔の雑草を刈り払ふこと」

※アブシバレーについては「琉球国由来記」に「四月中、公所より日を選び、諸間切に於いて其の日の吉人、吉方に向て畔之草を払去して、國中の男女俱に二日、常の事業をなさず遊ぶ也」とある。各家庭ではご馳走を作つて食べ、ところによって青年たちがアシピナーなどで相撲をとつたりするところもあつた。アブシは畦のことだが、山口県大島でもかくいうし、岩手県中部ではアブというのだという。「由来記」は畦に生えている草を除去する意に考えているが、山内盛薫の「南島八重垣」や「沖繩語辞典」は、畝いに解している。勸農は農業を勧め奨励する意であるが、それならば、原山勝負やウジュンビラのほうが訳語としては近いのではないかと思われる。識名園には国王がウジュンビラを見たという勸耕台があつた。

339 躑子 上全 「ナシ」

※上全とは「跛子 ナエクラ」のこと。これに宮良氏は「△ネーグ」としている。ネーグは跛行そのものをいい、その人はネーグという。躑子も現中国語で俗に足の不自由な人をさすので、

正確にはネーグーというべきである。

341 帯魚 ハサケヤイヨ 「(略)」

※帯魚は中国ではタチウオのこと。タチウオはタチヌ・イユというが、これと似たダツの仲間にはシカー（与勝）というのがある。これか。